

Teaching Tips

授業改善のための 事例集2024



CONTENTS

01	はじめに	1
02	KSUグッドプラクティス賞	2
03	事例1 ICTおよび授業アシスタントを活用した演習の実施	3
04	事例2 少人数型授業における複数のアクティブラーニング手法の活用	4
05	事例3 小規模クラスにおいて学生の理解度を測りながら応答的な授業を目指すために	5
06	事例4 受講生の理解度・疑問点を、手軽に、細かく確認するために	6
07	事例5 学生の主体的に学ぼうとする意欲を育み継続させるために	7
08	事例6 大人数授業で実現する「参加型学習」の工夫	8
09	事例7 学びの意欲向上の場、そして共感の場としての教室づくり	9

01 はじめに

本資料は、令和6年度KSUグッドプラクティス賞として表彰された先生方が、学生の学習意欲や理解度向上を目的に日々の授業において取り組まれている様々な工夫を集約した事例集です。

各先生方の授業改善における参考として、是非積極的にお役立て頂けましたら幸いです。

引き続き、本学FD活動の推進に対するご理解・ご協力の程何卒よろしくお願い致します。

令和7(2025)年6月6日

大学改革推進本部教育企画推進室

※各事例の詳細に関するお尋ねについては、担当教員にお問合せ下さい



02 KSUグッドプラクティス賞

目的

- ・大学全体（機関水準）におけるFD活動の一環として、授業アンケート結果を組織的に活用すること
- ・学生からの評価が高い授業を実践し、教育改善に取り組む教員を表彰すること
- ・授業における様々な工夫（好事例）の共有を通じた授業改善の一助とすること

対象科目

※令和6年度実績

- ・本学専属教員が担当する学部の講義科目
- ・但し、以下に該当する科目は除外
 - ①教職等の資格課程科目
 - ②授業アンケートの回答者数が10名未満の科目
 - ③授業アンケートの回答率が60%未満の科目
 - ④当該科目の履修者全体の出席率が70%未満の科目

基準

※令和6年度実績

(1)規模及び人数

- ・履修者数に基づき5区分し、各区分の上位2名を選出

(2)得点

- ・授業アンケートの6項目(問3・4・7・8・9・10)を使用
- ・但し、当該科目への出席率が70%未満である学生からの回答は除外
- ・上述を除く授業アンケートの最終回答率をウエイト付け

事例
01

ICTおよび授業アシスタントを活用した演習の実施

所属 理工学部情報科学科

氏名 下川 俊彦 教授

主な担当科目 情報リテラシー、プログラミング入門、プログラミング基礎I、プログラミング基礎II など



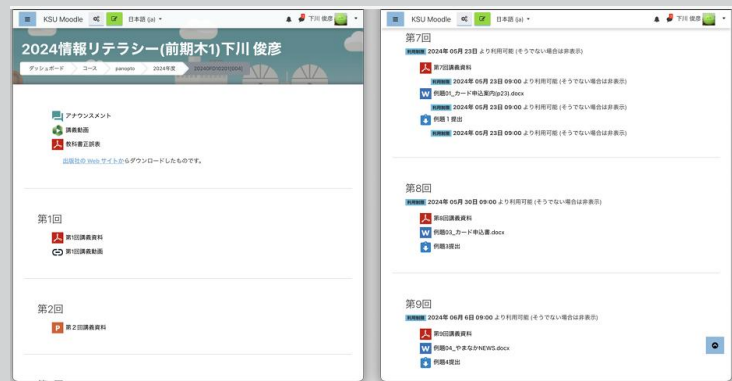
授業実践Point

演習系の講義を進めるにあたって、学内で提供されている ICT 機能を活用しています。また、TA/SAらの授業アシスタントが、演習を円滑に進めるにあたって、重要な役割を果たしてくれています。



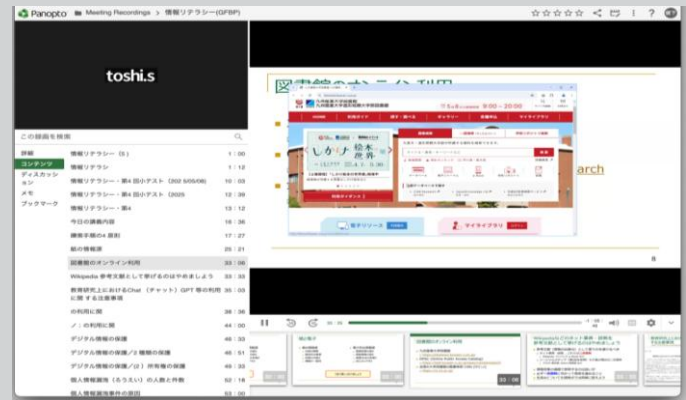
KSU-Moodleの活用

講義資料の配布や、レポート課題の提出にKSU Moodleを活用しています。本学には、e-Learning系のシステムとしてK' sLifeやMoodleなど複数のものが存在しています。Moodleは、講義回ごとの資料提示や、レポートの回収、TA/SAを参加させることによる授業補助の実施、Tips2で触れるPanoptoとの連携、学生の活動ログの確認など、充実した機能を持っています。



Panoptoの活用

本学では、Zoom と Panopto を組み合わせることで、比較的容易にすべての講義で講義録画が可能です。録画した動画は、Tips1で触れたKSU-Moodleから閲覧できます。今回表彰の対象となった、グローバル・フードビジネス・プログラム向けの情報リテラシーを受講しているのは商学部や生命科学部の学生ですが、復習に活用してくれていることがアクセスログからも確認できています。



TA/SAによる演習補助

TA/SAについては、可能な限り最大数のTA/SAを配置しています。TA/SAには、講義時間中の小テストの採点、演習のチェック、質問への対応などを担当してもらっています。教員一人では、目が行き届かないところまで演習支援ができています。また、教員とは違った目線での質問への回答も評判が良いようです。一方で、TA/SAにとっても、担当する講義内容の復習となっており好循環を生み出しています。今後は、TA/SAの人数拡大を期待したいです。



事例
02少人数型授業における
複数のアクティブラーニング手法の活用

所属 地域共創学部観光学科

氏名 藤原 なつみ 准教授

主な担当科目 GFBの基礎、GFBの展開・応用、GFBの実践、食と文化、フードツーリズム論、PBL B

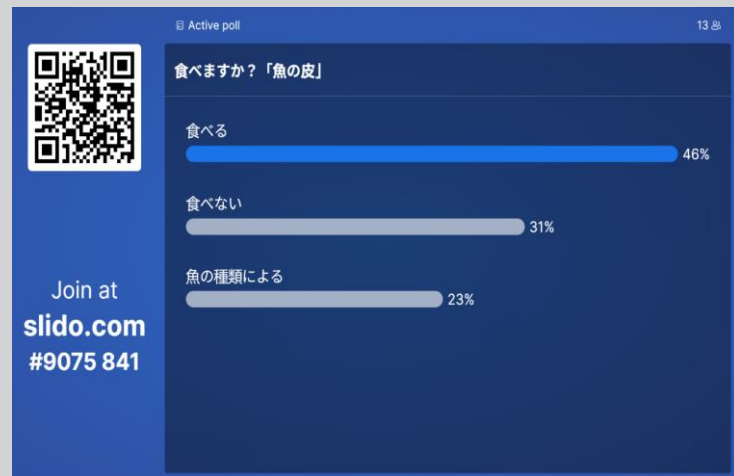


授業実践Point

グローバル・フードビジネス・プログラム（GFBP）は少人数の学部横断型プログラムなので、学生同士のコミュニケーションを大切にしています。一つの授業内で複数のタイプのアクティブラーニング手法を取り入れることで、学生の対話や能動的な学びを促すことを心掛けています。

クラウドサービスを活用した
双方向型授業の設計

「食と文化」の授業では、双方向型授業を意識しています。例えば、食をめぐる価値観の多様性を学ぶ授業では、身近な食材（魚の皮など）を食べるかどうかについて受講生に回答してもらい、その結果を全体で共有することで同じクラス内でも様々な価値観があることを実感してもらいます。その後、豚肉、鯨肉、菜食や昆虫食などに対象を広げながら、文化や宗教を背景とした食の価値観の多様性を学んでいきます。工夫している点として、「Slido」というクラウドサービスのツールを用いて匿名でライブアンケートを行っています。匿名にすることで本音を回答しやすく、他の受講生の回答を直ちに確認できるという利点があります。PowerPointスライドに埋め込んだQRコードをスマートフォンで読み込むことで回答できるので、講義を中断することなく進められるのも便利です。

ジグソー法を取り入れた
協同学習の促進

海外の食文化を学ぶ際、アクティブラーニングの手法の一つである「ジグソー法」を取り入れています。具体的には、受講生全員にアジアやヨーロッパの国々から一つの国を選んで担当してもらいます。その国の料理や食文化について事前に調べてきた内容を授業内で相互に教え合うことで、ジグソーパズルのように相互に知識を補い合うことをめざします。食そのものについて知見を深めることができるだけでなく、食文化について調べ、学ぶ際にはどのような視点が重要であるかを主体的に考えてもらうねらいがあります。



五感を通した学び

グローバル・フードビジネス・プログラム（GFBP）は食について学ぶプログラムなので、食材を実際に見たり味わったりして、五感を通して学ぶ機会を大切にしています。過去には、アワやキビなどの雑穀を実際に目で確かめて食べながら主食について学んだり、硬水と軟水を飲み比べたりしました。日本は山の傾斜が急で海に近い地形であることから、水はミネラル成分の少ない軟水になります。昆布や鰹節を使った出汁の旨味を引き出すためには軟水が適していると言われており、水の違いが和食のおいしさを引き出していることがわかります。



事例
03

小規模クラスにおいて学生の理解度を測りながら 応答的な授業を目指すために

所属 人間科学部子ども教育学科

氏名 田中 沙織 准教授

主な担当科目 子どもの保健、子どもの健康と安全、乳児保育演習、幼児理解の基礎 など



授業実践Point

資格・免許の取得という同一目的を持った50名以下の小規模クラスにおいて、学生が将来への見通しを持ちながら自己教育力を身に付けるために、学生の理解度を多角的に評価しコミュニケーションを図りながら授業を構成しています。

Tips 1

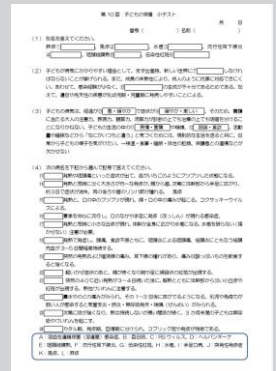
学生の理解度を踏まえた 授業構成の工夫

特に初学者に向けた基礎的知識修得を目的とする座学では、学生が受動的になりがちであるため、毎授業の学生の理解度を教員と学生相互が客観的・主観的に理解し、授業の進捗や補足説明を行う部分を定めて知識の定着を図っています。



具体的な例

- ✓毎授業開始時の小テスト実施。
- ✓授業に対する学生コメントと小テストの点数を記入するシートの活用。
- ✓授業中の発問に対する討議・発表。
- ✓予習復習の確認とそれに基づく授業内容の構造化。



Tips 2

キャリアデザインを 意図した授業内容の工夫

学ぶべき基礎知識や技術に対して、具体的事例と関連させながら領域の面白さを伝えるようにしています。学生の授業アンケートからも知識や体験に紐づくことで将来の姿が想像しやすいようです。



具体的な例

- ✓教員の体験・実践経験、保育現場の事例検討（個人・グループ）、映像視聴など具体的事例の提示。
- ✓授業内容を理解する意義、専門性が発揮される場面などの理解を通した学習の動機付け。
- ✓実地見学、子育て支援室での支援体験、実技、実習等、教員同士の科目間連携に基づく理論と実践の往還。（カリキュラムマップを踏まえた学科全体の取り組み）

Tips 3

学生の学びの多角的な 評価方法の工夫

学生の学びを評価するために、以前は言語表現を介した評価を多く用いていました。（例えばレポートや課題シート）しかし、生成AIの台頭も相まって、言語表現だけでは評価が難しい学修内容があると感じます。そこで評価の改善を図り、初回授業に提示するルーブリック評価に合わせて、様々な側面から評価を行っています。

具体的な例

- ✓プレゼンテーション、教材・教具の作成、実技の合評、6コマ漫画の作成など。
- ✓例えば「課題で理解した乳幼児の発達を6コマ漫画を用いて表現する」という課題では、情報を咀嚼し、短い言葉と展開で端的に自分の考えを表現する「個性豊かな回答」が集まった。



事例
04

受講生の理解度・疑問点を、手軽に、細かく確認するために

所属 建築都市工学部建築学科

氏名 富田 英夫 教授

主な担当科目 日本建築史、西洋建築史、近代建築史、保存修景計画 など

授業実践Point

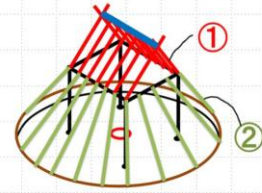
毎年同じ学科・同じ学年で開講する専門必修科目であっても、受講生の理解度は毎年異なることから、目の前の受講生に合わせて授業を微調整するため、受講生の理解度・疑問点を、手軽に、細かく確認しています。

クリッカーによるクイズ
感覚の予習・復習

授業での発言に対して心理的安全が確保されていないと思う受講生も、匿名のクリッカーであれば手軽に意思表示できる。

- ①すぐに答えが出て解説があるので、クイズ感覚で復習できる。匿名で他の受講生の理解状況がわかるので、受講生は自分の理解度を相対化できる。
- ②教員は、受講生が意思表示しにくい事も、尋ねる事ができる。

【復習】①②の名称は？



クリッカーの利点

匿名
間違えても良い他の受講生の理解
状況がわかる

すぐ答えが出る

すぐ解説がある



正解はA。BCを選んだ学生も多い。→ もう一度解説する。

理解度調査と質疑応答

「どんな質問にもきちんと回答する」という姿勢で回答する事で、いろいろな理解度の学生からの疑問に答える。

- ①毎回高度な質問を寄せてくる学習意欲が高い受講生の知識欲に応える事ができる。
- ②授業で説明した事項への質問にもきちんと回答する事で、受講生は基礎的内容を再確認することができる。
- ③手軽な理解度の調査でも、受講生の全体的な理解度の傾向を知る事ができる。

授業終了時の授業の理解度調査の結果



質問への回答の例



KSU-Moodleの活用

公開に支障がある部分（試験の解説など）を除いて公開し、受講生の学習をサポートする。

- ①教室のスクリーンが見えにくい受講生が、手元でパワーポイントを見る事ができる。
- ②パワーポイントの切り替わりが早い/遅いと感じる受講生の要望に対応できる。
- ③欠席した学生が授業内容を確認できる。
- ④タブレットでペン入力する学生がPDFに直接入力できる。
- ⑤受講生が、試験前に動画を視聴し、復習できる。



学生の主体的に学ぼうとする意欲を育み継続させるために

所属 基礎教育センター

氏名 森 誠子 教授

主な担当科目

実用国語(文章力)、ロジカルライティング入門、実践クロス演習(時事問題と向き合う)、文学の世界



授業実践Point

学生が「この授業を聞きたい」と思えるよう、学生と教員との肯定的な関係性の構築をまず大切にしながら、学生には「わかる」だけでなく「できる」ようになることの大切さを伝えていくことで、継続した学習習慣へとつなげられるよう心掛けています。

「できる」に繋がる
自発的な行動を促進

授業を聞いて「わかる」とこと、それを自分で「できる」との違いを伝えながら、確認テストの結果等を踏まえ、次はどのように取り組むのか、PDCAやKPTなどのフレームワークを用いて、学生自身の振り返る時間を設定し、次の取り組みに繋げています。

①学生が、自身のできること・できないことを理解し、それを踏まえて継続して取り組める自分なりの方法を見つけていけるよう促しています。

②具体的な達成をイメージさせ、それに向けて取り組むべきことについて、それぞれの段階に応じて学生自身に具体的にアウトプットさせています。

[illegible][illegible]

「話力」の向上を心掛ける

高校で非常勤講師をしていたとき、伝える内容は同じに関わらず、生徒が「話を聞く先生」と「話を聞かない先生」とに分かれ、私は明らかに後者でした。そのとき高橋俊氏が定義する、教員の「話力＝人間性×内容力×対応力」という「公式」に出会い、「話力」を磨くことを意識することで、学生(生徒)との関係が改善しました。

- ①人間性：話をする上での人間的な魅力（信頼感・肯定観・明朗性など）。
②内容力：教材等に対する的確な把握力、かつ、的確に表現する力。
③対応力：学習者の、聞き手としての「三つの本質的特徴」に対応する力。
※三つの本質的特徴：親しみを感じやすい・飽きやすい・環境の影響を受けやすい



高橋俊三「教師の話力が物を言う」
『国語教育（特集：導入で子どもの心をつかむコツ）』No. 718、明治図書、2010年2月

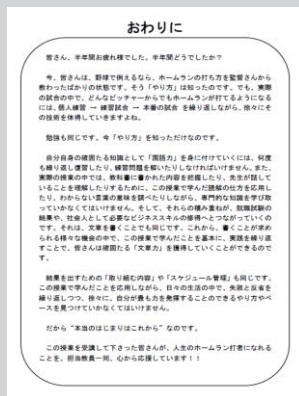


高橋俊三『教師の話力を磨く』（明治図書、2006年3月）

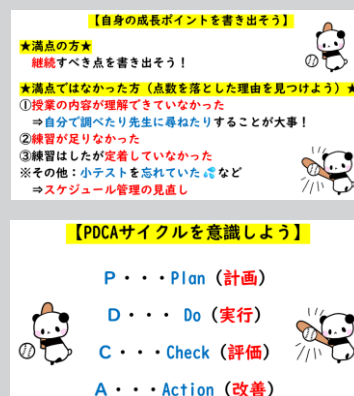
気づきを促すためのアプローチ

知識・技能の修得のみならず、それを実践する場での態度・振る舞いの大切さも伝えていきます。

- ①立場や視点を変えて考えさせることによって、(合理的な配慮の対象でないのに遅刻や欠席また途中退室等を繰り返すことが)相手にどのように映るのかを自然に気づけるよう提示し、学生自身の行動改善につなげています。
- ②上記を継続するための具体的な行動プラン(体調・生活習慣の管理や事前準備の必要性)を、学生自ら考え実践できるよう促しています。
- ③「現状を嘆かず改善策を考えよう」「失敗しても謙虚に受けとめ修正していこう」と、教員自身でもまだまだ不完全な私のことでも正直に自己開示しながら、向上心を持ち続けることの大切さを伝え、ともに成長していこうと伝え続けています。



2025年度『実用国語（文章力）』テキストより



事例
06

大人数授業で実現する「参加型学習」の工夫

所属 商学部経営・流通学科

氏名 方 慧美 准教授

主な担当科目 マーケティング入門、小売マーケティング論 など

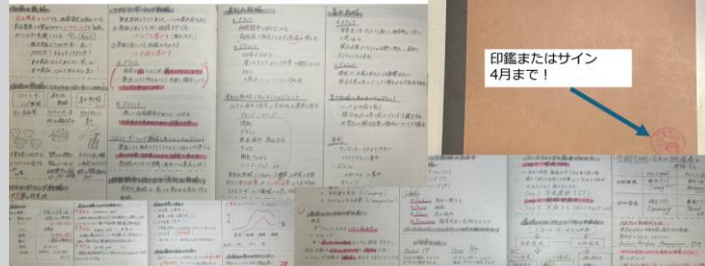
授業実践Point

本講義は1年次の学部共通科目として、大学での学びが初めてとなる学生約200名を対象に実施しています。そのため、「大学の授業＝一方的に聞くだけ」というイメージを払拭し、学生が自分の意見を安心して表現できる“参加型授業”を心がけています。

Tips
1
オリジナル「マーケティングノート」の作成

1年次の導入科目として、学生に「オリジナル・マーケティングノート」の作成を課しています。このノートは、ノートの書き方を学ぶと同時に、授業内容を整理し復習する目的、さらに新聞記事や身近な事例、自分なりの発想などを記録することで予習にもなる実践ツールです。単なる記録ではなく、自分の視点でマーケティングを捉え、社員ではなく「社長」として考える力を養うことを意識しています。試験ではこのノートのみ持ち込み可とし、知識の活用力を評価しています。試験対策目的の直前作成を避けるため、4月中に提出させ、サインまたは印鑑を押しています。

マーケティングノート（試験持ち込み可）



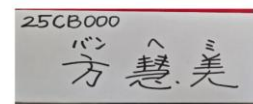
試験の合格率がとても高くなりました！
過去）プリント持ち込み、A4用紙1枚持ち込み

Tips
2
大人数授業における
雰囲気づくりと復習の工夫

200人規模の授業では、集中できる雰囲気づくりが重要です。そのため、名札（学籍番号・氏名記載）を導入し、授業態度への意識を高めるとともに、ペアワークや発言時に相手の名前を呼ぶことで、対話を促進しています。復習では、前回学習したキーワードを提示し、学生同士で質問・回答を行わせ、答えられない場合は資料を確認しながら協働学習を行い、最後に教員が内容を整理・補足します。これにより、主体的な学びと知識の定着を図っています。

授業雰囲気をもとめるための工夫

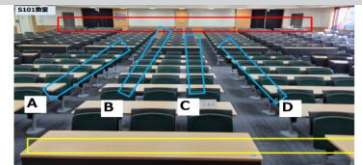
・名札の作成



・授業態度が良くなる

・自己紹介に使う

・名前と呼べる



使用する教室 S101

Tips
3
授業のバックアップと
レベル別学習支援の工夫

授業ではMicrosoft Teamsを活用し、スライド資料や授業内容の録画を随時アップロードしています。これにより、欠席した学生や留学生、授業の進行が速いと感じる学生でも、いつでも復習できる環境を整備しています。また、商業高校出身者や資格取得を目指す学生、トレンドに関心のある学生には、実践事例や最新情報、試験対策資料などを追加で提供し、より深い学びができるようにしています。授業では全体の平均に合わせた講義を行い、授業後には「基礎の補強」と「発展的学習」の2つのレベルに対応する体制を構築しています。

授業のバックアップと通知（Teams）

授業資料はチームズで公開

@にチーム名を入力してメンション

授業は活動が多いため、そのままアップロードは厳し。そのため、コロナの時に作った**授業動画**を参照のために共有

事例
07

学びの意欲向上の場、そして共感の場としての教室づくり

所属 基礎教育センター

氏名 猪本 修 准教授

主な担当科目 実用数学(計算力)、実用数学(活用力)、AI導入、データサイエンス実践演習



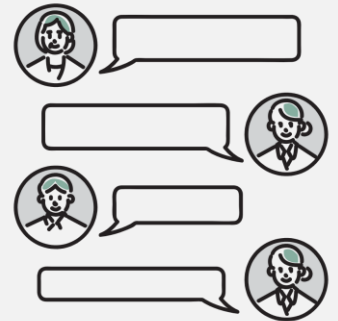
授業実践Point

履修学生が学びの主役であることを意識しながら、学びの意欲をどう高めるか、またそのために学生との対話をどう実現するかを常に考えて授業を実践しています。教室規模によって少し方法が異なるものの、基本は同じだと考えています。

Tips
1

対話を重視した双方向型の工夫

学生が授業に主体的に参加し、その場を作っているという感覚をもつことは、学生が意欲的に学修に取り組む上で大切なことだと思います。小規模クラスでは毎回提出する課題用紙に感想・意見欄を設けて、学生の考えや意見を書いていただいています。大規模クラスではフォームの感想・意見欄にデジタルデバイスにより入力していただいています。いずれのクラスでもプライバシーに配慮しつつ、頂いた意見をクラス全体で共有するとともに、学生の意見を尊重し、フィードバックを丁寧に行うようにしています。教員の誠実な態度を学生に示すことができる一つの方法だと考えています。

Tips
2

配慮は皆のため

履修者数に応じて、配慮を要する学生が複数いる場合があります。特に大規模クラスでは座席を指定し（または固定し）、配慮を要する学生がどこに着席しているのかをきちんと把握をしたうえで、毎時間の様々な場面で学生に目配りをするのが大切だと考えています。困難や苦痛は学生の表情や仕草で察することができるので、絶えず視線を交わして学生の状況を把握し、気にかけていることを知ってもらうことで安心感が繋がるので効果的と思われる。

なお、軽重の差があっても、教室にはさまざまな特性を有する学生がいることを認識しておく必要があると思います。要配慮の申請はそれを必要とする学生の全員がするわけではなく、また本人がそれと気づいていない場合も少なくありません。授業参加をスムーズにするための教員からの配慮は、特定の学生のためだけでなく、多くの学生に同時に役立つものであるという認識が教室全体に安心感をもたらすものだと思います。

Tips
3

見やすい黒板は学修意欲を高める

時代の流れはAIやDXへのシフトが盛んで、教育の場でもデジタルへのシフトが是とされる風潮にあります。が、物事にゆっくりりっかり取り組み、丁寧に考えるには紙と鉛筆は今も有効ではないでしょうか。大規模教室では、やむを得ずスライドをスクリーンに投影する方法で授業をしていますが、小規模教室ではできる限り黒板で授業をしています。丁寧に見やすい黒板は学生の注意をこちらに向けことができ、また、ひと目で森（全体）も木（部分）も見ることができるため、学修意欲が向上するようです。ローテクな方法が振り向かれなくなりつつありますが、学生の深い学びのためには今も変わらず効果的ではないかと思っています。なお黒板のフォトコピーと関連資料はクラウドで公開しており、学生はいつでも参照できるように配慮しています。





編集・発行

大学改革推進本部教育企画推進室

☎ (092)-673-5264

✉ edu-office@ml.kyusan-u.ac.jp